

5. 実績

視覚評価を目的とした施設支援（事業団が運営する児童発達支援センターのみ）について、平成28年度から令和2年度までの実施施設と回数、延人数を表2に、検査内容内訳、遠見視力測定率を表3に示します。

視力には、近くの物を見る視力「近見視力」と遠くの物を見る視力「遠見視力」の2種類があり、就学前の視覚評価においては、近見視力に加え、遠見視力の検査も行うことが望ましいとされています。

平成28年度までは、遠見視力は「ランドルト環」のみの検査で、遠見視力の測定率は全体の13%でしたが、平成29年度より、「リー・シンボル」による検査も新たに導入し、令和2年度の遠見視力の測定率は全体の33%にまで増加しました。

【表2】施設支援の実施回数と延べ人数

施設名	2016年度 (H28)		2017年度 (H29)		2018年度 (H30)		2019年度 (R1)		2020年度 (R2)	
	回数	人数	回数	人数	回数	人数	回数	人数	回数	人数
あいあいセンターびびよ園	3	43	5	61	5	55	5	47	7	55
あいあいセンターにこにこ園	4	14	3	19	4	21	4	16	3	12
めばえ学園	3	48	3	57	3	56	3	56	3	46
あゆみ学園	3	29	2	23	2	18	2	20	2	17
西部療育センター	4	78	4	84	4	94	4	88	4	65
東部療育センター	4	49	4	80	4	67	4	67	3	44
合計	21	261	21	324	22	311	22	294	22	239

※R2年度は新型コロナウイルス感染症の関係で9月～2月の期間での実施

【表3】検査内容内訳

	2016年度 (H28)	2017年度 (H29)	2018年度 (H30)	2019年度 (R1)	2020年度 (R2)
TAC	221	237	237	204	156
ランドルト環	33	14	13	4	30
リー・シンボル		64	55	78	48
その他	7	9	6	8	5
合計	261	324	311	294	239
視力測定率	97%	97%	98%	97%	98%
遠見視力測定率	13%	24%	22%	28%	33%

6. 考察

遠見視力は検査機器などでの他覚的な測定ができないため、検査を受ける子どもの指示への応答性や理解力が求められます。特に、このような指示への応答性や理解に困難さがある知的障がい児や発達障がい児の遠見視力の測定について、「リー・シンボル」による検査が効果的であった理由として、以下の点が考えられます。

① シンプルな図形の指標であるため。

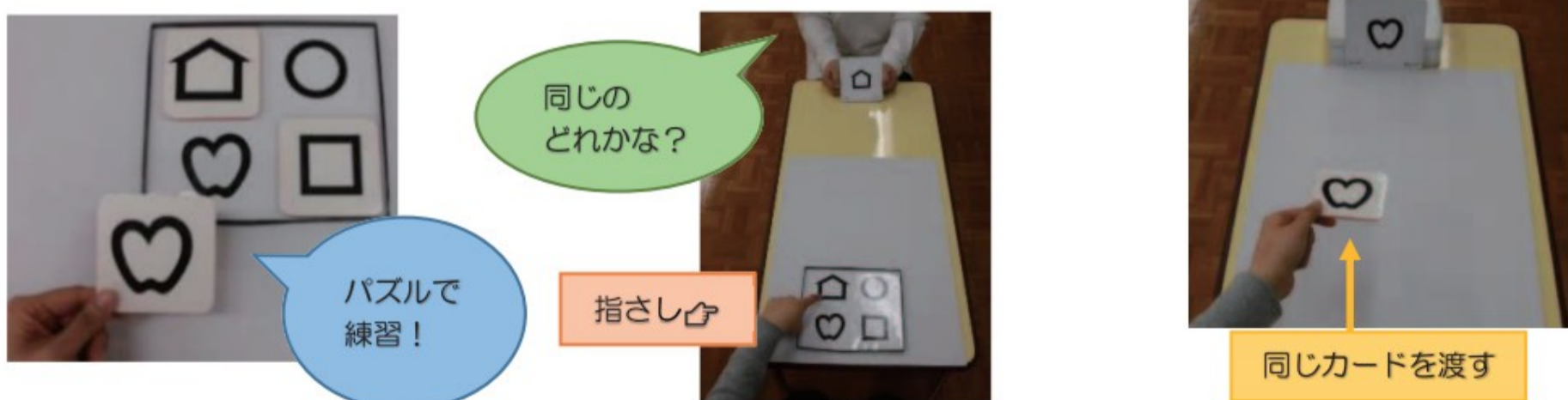
→視覚認知力が2歳半程度の発達段階にあれば測定が可能ですが、発達障がい児は図形やマークへの興味を持つことが多いため、検査への意欲が高まったと考えられます。

② スモールステップでの実施が可能であるため。

→はじめに図形の弁別が可能かどうかで、応答性や理解力を見極め、成功した場合のみ検査を進めました。この方法により失敗で気持ちを崩すことなく、成功体験を積みながら自信を持って検査に取り組むことができたと考えられます。

③ 様々な方法での回答が可能であるため。

→図形を言葉で答えるだけでなく、指さしやジェスチャー、カードを渡すなど、子どもの発達段階や障がい特性に応じた多様な回答方法があったことにより、より選択しやすかったと考えられます。



「ランドルト環」での検査だけでなく、「リー・シンボル」による検査を導入したことで、遠見視力の測定率が増加し、日常生活だけでは気づきにくく、見落とされやすい障がい児の視覚の問題をより正確に、早期に発見することが可能となりました。

平成12年度から視覚評価を開始し、今年度で21年目を迎えますが、今後もこれまで培ってきたノウハウを活かし、支援が必要な子どもの早期発見と支援の充実に取り組んでまいります。